

「平成27年度花葉会海外ツアー カザフスタン」に参加して

高野 恵子

平成27年5月29日から6月6日まで、カザフスタンへの植物観察ツアーに参加した。カザフスタンは、中国、インドに次ぐアジアでも3番目に広い国土を持つ内陸国で、中国北西部からカスピ海まで広がり、北側はロシアに、南側はキルギスタンやウズベキスタン、トルクメニスタンに接している。国土の多くは乾いたステップ（温帯草原）と砂漠で、地方は農牧畜がおもな産業であるものの、豊富な天然資源があり、GDPも高く、政情も安定しているということである。カザフスタンは、リンゴの原産地で目的地のアルマティーは、「リンゴの故郷」という意味だそうだ。通貨はティング、ツアー時点で1ドル=135ティング位だった。

5月29日（金）

成田空港には10時30分集合で結団式が行われた。添乗員の青木さんを含め総勢21名。鈴木団長の挨拶の後、アジアナ航空で13時30分に空港を出発し、仁川国際空港で乗り換えてアマルティーには、21時40分（現地時間）に到着した。空港では、ガイドのジャドラさんという女性が待っており、ホテルまでの30分の道のりのうちにカザフスタンやアルマティーについて説明してくれた。人口1,600万人のカザフスタンは、イスラム教国にいくつかあるスタン（の国）を国名にもつもの、100以上の民族に分かれていることから宗教も人種も多様でイスラム色は強くないそうだ。現在の首都は北のアスタナに移転しているが、旧首都のアルマティー（海拔648m）は人口150万人で今も同国最大の都市である。空港からホテルまでの町並みは大木が茂る中にビルが見え隠れしている。父や祖父のソビエト連邦時代に木を植えて育てると減税されるという制度があり、それが緑豊かな都市を生み出したそうだ。

5月30日（土）

天気はよく、朝8時に2台の四駆のマイクロバスに分乗してホテルを出発し、アルマティーの南方30キロ程のビッグアルマティー湖（標高2,500m）方面に向かった。この日から、ジャドラさんのほかに74歳の同国で

有名な植物学者のDr. Anna（アンナ先生）と助手の女性加わった。

湖の上の到着地は、中国から続く天山山脈の中腹で、山脈を越えるとキルギスタンに至るという場所で国境はすぐ先にあり、軍が管理しているゲートがあった。その先は、現在キルギスタンともめているということで入れてもらえず、アンナ先生とジャドラさんが交渉している間、周囲の傾斜地の草原を観察した。紫や白、黄色のピオラ、アリウムや黄色のチューリップ（*Tulipa heterophylla*）、黄色のポピーや、白紫のオキナグサなどが咲いており、みんな大喜びで写真を撮っていたが、軍との交渉が決裂し、銃を持ち大きなシェパードを連れて軍人が集まり始めたので、仕方なくそこを去ることにした。次に、ビッグアルマティー湖に戻り、周辺では、白いクレマチスや紫色のポリガラ、たくさんの白いアネモネが見られた。その後、開けた場所で昼食をとり、下りながら所々で車を止めて観察を行った。黄色のチューリップ、ピオラの群生、サクラソウモドキなどいろいろな草花を夢中になって撮影していると、アンナ先生から大きな針葉樹（トウヒ）には5～6月はダニがいるので、下にいかないようにと注意を受けた。刺されると高熱が出るというので、日本でも問題になっているマダニのようなものかと思った。

途中の川沿いでは、多くの人たちがあちこちでキャンプをしていた。休日には山に出かけ、家族で時間を過ごすことがアルマティー市民の楽しみだという。

5月31日（日）

朝6時に荷物を出して、朝食後にチェックアウト。アンナ先生の勧めで当初の予定を変更し、植生の異なるという標高1,800mのアルマタウ（タウは山の意）へ7時30分に出発した。途中、白い花のヤブサンザシや野生のリンゴの大木がたくさん見られ、白樺の林に沿って走るなど、前日の植生とは大きく違っていた。しかし、朝から雨模様で、現地に着くころには霧雨になってしまい、皆、雨具をかぶり、森の合間に広がる

草原を濡れながら散策した。アンナ先生から、「小川の対岸の急斜面にはシャクヤクがあるはず。」と言われ、皆で探したところ赤い花が点在しているのが見えた。そのころには雨も上がっており、皆、斜面の対岸に渡り、数十株の赤いシャクヤク、アイリスや黄色や白のバラなどの花を撮影した。その場所でサンドイッチの昼食をとり、長岡さんたちが前夜に街で購入してきたアンズとサクランボもいただいた。



野生のリンゴ

午後は、再び下りながら観察会を行った。ピンクのチドリソウやスイートピー、アリウム等の花が見られたが、途中、足をねんざした人と傾斜地を降りる際に足を滑らせて骨折した人が出たことから急ぎアルマティーに戻り、2人は病院に行った。治療後、大事をとって骨折した人はジャバグリ村に行かず市内に残ることになった。

レストランで夕食後、寝台列車で18時頃にほぼ時間通りにジャバグリに向けて出発した。当初4人で2段ベッドのコンパートメントの予定だったが、2人で一室に替えてもらえたので広々と休むことができた。一応、枕も毛布も備え付けられており、サービスでインスタントのコーヒー・紅茶、歯磨きセットが付いてい

て、お湯も、通路の一部に備え付けられていた。出発して少しして、車内販売が食べ物、ビールやウオッカを売りに来たので、バナナとピロシキを買った。まだ明るく、ドアを閉めたまま話しているといきなり警察がドアを開けて何も言わずにジロリと見て通り過ぎた。後で聞くと、車内で飲酒すると罰金を取られるとジャドラさんに聞いていた組は、警察が通り過ぎてからドアをロックして楽しんだが、聞いていなくてドアを開けたままお酒を飲み始めた組は、警察が来て罰金5千ティングを請求され、ジャドラさんが「この団体は日本を代表する植物調査団であり、初めてのことであるので友好のためにも目こぼししてください。」とお願いして許してもらったようだ。

列車は、夕暮れから日が沈んでいく中、草原を西にひた走った。所々で、民家の明かりがポツン、ポツン見え、月明かりにラクダの親子の影や向こうの草原に馬の親子の群れがうかぶ幻想的な風景にずっと見とれていた。

6月1日（月）

朝5時頃から明るくなり始め、線路沿いの平原を見ると真っ白い宿根スターチスに似た花（*Crambe orientalis*：ハタザオの仲間）が一面に咲いており、黄色や紫の花も見えて、お花畑のようなところを走っていた。左手方向には、雪の天山山脈が見えていた。



天山山脈とクランベ

列車は、7時にチュルクバス駅に到着し、そこから迎いのバスでジャバグリ村の民宿に8時過ぎに着いた。9時に簡単な朝食、10時に2台の車でアクシュ・ジャバグリ自然保護区の北方、天山山脈の一部であるカラタウ（黒い山の意、一番高い所で2,400m）近郊のサヤス丘陵に向かった。到着は12時過ぎ、お弁当を食べ、沢沿いに山に入った。アンナ先生の話では、ジャバグリにある1,800種類のうちの180種は固有種で、この

エリアは夏には雪がなくて乾燥しているけれど、春3月ごろには原種のチューリップなどが咲き、山一面を赤や黄色に染めるということだ。登り口には、*Rosa persica* (黄色い花が咲くバラの原種だそう) と4〜5種類もの野生の麦、登っていくと種のついたチューリップやアイリス、フリチラリアの残骸がたくさん見られた。

16時ごろ帰りの途につき、途中近くの湖2か所に寄った。周囲は乾燥しており、植相は貧相だったが、水辺の近くには、ダイアンサスやタヌキマメなどがぼつぼつ見られた。帰りの草原では背の低いピンクの花がたまって見られ、近づいてみると驚くほど鋭いとげがびっしり枝に着いた *Acanthophyllum pungens* という木本だった。

夕食は、豆やジャガイモの入った野菜スープに焼き魚、ハーブのディルをかけたキュウリ、パン等だった。味付けがあまり合わず、青木さんやそのほかの人の持ってきた醤油やドレッシングをかけたりしていただいた。

6月2日(火)

7時に朝食、8時に出発して西天山山脈のキシカンディー山(標高2,500m)方面に向かい、15分ほどで登り口に着いた。この日は、村からレインジャー2名が同行し、自然保護区で許可のない車は奥まで進めないということだったが、ジープ1台は山岳地まで入れることになり、足の弱い6〜7人はそれに乗って登って行った。

この地域は雨が多いようで麓には森や沢があり、しばらく歩くと森を抜けて草原が広がった。花の種類はきわめて多く、登るにつれてブルーや2種類のピンクのアリウム(濃いピンクは西のエンデミック)、黄色いアイリス、イキシア、オレンジ色のアドニス、真っ赤な種を付けたルバーブの株などいろいろな植物が見られた。草原に入ると、3種類のウイキョウのような植物が現れ、葉の細いのは *Ferula tenuisecta* (固有種) とのことだった。写真を撮りながら2時間ほど歩いたが、雪をかぶった頂上までは行けずに中間地点の滝の見える場所で引き返した。滝の岩場には、アイベックスの親子が住んでいてレインジャーが場所を教えてくれた。

民宿には、16時ごろに戻った。夕食は、肉か魚で似たような献立だったが、このころからぼつぼつおなかをこわす人が現れ、私を含めた数人は青木さんに抗生物質をもらい1日食事は禁止となった。大体1日で直ったけれど、生野菜などサラダで出てくるものに問題が

あったのかもしれない。

夕食後、アンナ先生の知り合いだというカザフ人のお宅訪問があった。カザフ人は人を招くことが大好きだそうで、民族衣装で正装した大家族が迎えてくれた。大部屋にたくさんの揚げパン、焼いたパン、お菓子やナッツなどを用意して、お母さんがカザフのお茶をふるまってくれた。また、人に慣れさせることを兼ねるということで子供にいろいろな民族音楽や詩の朗読、踊りをさせて見せてくれた。私たちもお返しに「花」などの日本の歌を歌ったりして楽しく過ごした。



カザフのお宅で

6月3日(水)

朝8時に出発して、東方面のボラチ・アシュ峠を経由してアクシュ溪谷(標高1,800m)方面に向かった。途中、なだらかな平原の地域に一面の真っ赤なケシの群落があり、麓でみられるパペベルではなく、種子のさやが長いロエメリア (*Roemeria refracta*) という種類だった。アクシュ溪谷近くまで行くと2台のマイクロバスは入ることができず、そのあたりを散策しても植物相は貧弱で面白くない。そこでレインジャーが用意したジープはその先に入る許可を持っていることから、2班に分かれて順に道路の終点まで行って探索することになった。短い時間だったが、終点から傾斜地の草原を上がると、まだ咲いている真っ赤な *Tulipa greigii* や、そこだけにあるという *Iris* の花も数株見ることができて大満足だった。

6月4日(木)

朝7時30分に民宿を出て、シムケント空港9時45分発の国内線でアルマティーに戻った。市内で昼食後、国立博物館に行った後、一般市民のマーケットを視察した。国立博物館では、昔の人々のパオでの生活の状況や衣装などを見ることができた。マーケットでは、食肉や野菜、ドライフルーツ、洋服などあらゆる生活



チューリップの花を見られた

用品が売られていて入り口には両替所もあった。ここではドライフルーツを土産に買った。

その後、18時ころから市内のレストランでお別れの晩さん会が開かれた。この席で鈴木団長から、長岡さんに団長を引き継ぎ田中桃三さんらがアシストすると挨拶があった。乾杯の後は、民族楽器のドンブラの演奏を聴きながらの食事になった。ガイドのジャドラさんは民族衣装に着替えてきており、ドンブラの説明をして自らも口琴（名前はシャンコブズ。口に含み、1本の板バネを手で引いて音を出す楽器）の演奏やカザフに伝わる詩を謳ってくれた。食事は羊と馬の肉料理が中心で、カザフ人は冬になると一家族が1頭の馬をつぶし、冬の間それを食べ続けるという。馬乳酒や馬乳、ラクダ乳も出たけれど、青木さんからはおなかを壊すから自己責任で飲むようにとのこと。馬乳は酸っぱみのあるヨーグルトのような味で、いずれも美味しとは思えなかった。

6月5日（金）

朝6時起床、8時出発。アンナ先生の提案で予定を変更して、南のカスケーレン（標高1,800m）方面に出かけた。川沿いに上がって行き、1時間半ほど行ったところで引き返したが、それまでの場所と植相は異なり、結構たくさんの花を見ることができた。終点で

薄いブルーのアマの群落やティムスの花等を見て、下りながら観察を行った。道路沿いの山の斜面では、黄色いバラや赤いシャクヤクがあったが、2日目に見たシャクヤクより葉が広く、2週間ほど早く咲いている様子だった。

市内には14時頃戻り、メガマートで1時間ほど買い物をした後に民族楽器博物館を訪問した。ここは、自国の楽器だけではなくて世界の古い民族楽器まで集めて展示しており、二弦のドンブラやシャンコブズの演奏なども聞くことができ豊かに楽しむことができた。その後、18時に市内のレストランで食事をとり、20時には空港に到着した。アマルティーからの出発は23時15分だった。

6月6日（土）

仁川空港で乗り換え、成田には午後12時につき流れ解散となった。

今回も、たくさんの植物を見ることができて有意義なツアーとなりました。鈴木団長さん、長い間、ありがとうございました。そして、これからも楽しい花葉会の海外ツアーが続きますように新しい役員さんお世話になります。